

秋田県能代市「のしろ日本語学習会」

「のしろ日本語学習会」は、秋田県能代市において1991年より中国帰国者支援を開始し、1993年からは能代市及び隣接する山本郡在住の中国帰国者、日本人男性の配偶者である海外出身女性（以下、外国人配偶者と略記する）、ALT（JETプログラム外国人青年招致事業による外国語指導助手）など日本語を第1言語（母語）としない人々に対する日本語学習支援と生活支援を行っている市民ボランティア団体です。

木曜教室は、乳幼児を抱えてなかなか学習機会に恵まれない外国人配偶者が増加したことによって教室が開催されました。日本語学習の機会の提供と平行して、保育園・幼稚園入園前の乳幼児に対して日本語・日本文化への誘いを行ったり、夫（日本人男性）に対して日本語支援活動の意義や日本語習得の大変さの理解促進を図ったりしています。

1. 日本語教室の概要

(1) 実施日 毎週2回 火曜日 19:00-21:00 木曜日 10:00-12:00

(2) 学習者（登録者数：2004年6月現在）

・火曜教室 55名

中国帰国者（高齢者、成人、小中高生）、外国人配偶者とその子ども（学齢期で来日した児童・生徒¹、乳幼児）、公的機関研究員とその家族、留学生（高校生）、ALT など

・木曜教室 23名

外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者（母親）親子

(3) 開催行事

花見、バス旅行、キャンプ（海）、お茶会、書道、盆踊り、料理講習、忘年会（クリスマス会）など。季節行事（節分、雛祭り、子どもの日、七夕など）は、火曜教室の際に行っています。

(4) ミーティング

公式なミーティング及び日本語指導のための勉強会は月2回です。2000年度からは能代市の日本語ボランティア養成講座と連動させる形式で開催しています。

インフォーマルな打ち合わせは状況に応じて適宜行っています。

2. 教室運営

(A) 火曜教室

公民館の1室内で、大グループ（5人以上）・小グループ（5人以下）による教室形式とマンツーマン形式の併用形式をとっています。教室形式では、指導者1名と複数のボランティアが学習者の隣に座りサポートするチーム・ティーチング（T.T）形式をとっています。

グループによって、1) 1グループ内に様々な年齢、職業、出身国、日本語学習経験を持つ人々が学習している5人以上の大グループ、2) 比較的類似した背景（出身国が異なる複数の外国人配偶者や小・中・高校生、ALTなど）を持つ人々による5人以下の小グループ、3) 自動車運転免許取得のための学習や日本語能力試験受験のための直前対策、初級学習者のためのマンツーマン形式などがあります。

1年を通じて時期を問わず新規参加者がありますが、参加前の聞き取りと対話を経て、参加グループを決定しています。なお、外国人配偶者の場合は、夫・夫の両親など家族との面接を必ず行っています。

(B) 木曜教室

働く婦人の家・託児室内にホワイトボードと座卓を設置し、教室形式とマンツーマン方式の併用方式をとっています。教室形式ではグループ内に乳幼児を連れて参加している人と単独で参加している人が同時に学習を進めています。マンツーマン形式は初級レベルが中心です。

学習環境は、カーペット床に乳児用布団2組、歩行器・乳母車（学習者が持参）、託児室に備え付けの玩具・滑り台などの遊具、児童書を用意して乳幼児に対応しています。

乳幼児を連れた学習者の存在によって、結婚したばかりの学習者やすぐに出産経験を持つ学習者が相互に日本（地域）での生活に必要な情報を交換したり、子育てや日本語学習に関して助け合ったりしています。

¹秋田県では、近年、再婚として来日する中国出身女性が増加しています。前夫との間に子どもがいるケースも多く、子どもを連れて来日する、もしくは生活が安定した頃に子どもを呼び寄せる形態がとられており、中国残留孤児・婦人の家族以外の中国出身児童生徒が急増しつつあります。

乳幼児と共に学ぶ地域日本語教室の可能性

—秋田県のしろ日本語学習会の取り組みをもとにして⁽¹⁾—

集中したい学習者はたくさんいるし、日本語を勉強することを教室の基本とすれば、子供を受け入れてくれることはマイナスの要因にもなりませんが、¹⁰⁰といったコメントがみられ、子ども（乳幼児）は、日本語学習を始める存在として認識されている側面がある。

このように乳幼児を抱えての日本語学習は、1) 託児保育が整備されていないため、乳幼児を連れて参加可能な教室が少ない、2) 託児保育を行っていないが、乳幼児を連れて学習者を受け入れている場合でも、乳幼児の存在が、他の学習者や指導者の教室活動（学習・指導）を妨げる可能性があるため、乳幼児を連れて参加することを躊躇せざるを得ないという困難に直面している状況にあることが指摘できる。

また2002年度より開始された文化庁・親子参加型日本語教室開設事業のように、子どもを連れて参加可能な場合でも、委嘱された13地域のうち半数以上が、親が学習をする場と、子どもの保育の場とを別室としている⁽⁴⁾。

乳幼児と同室で学習することに対する否定的な認識⁽¹⁰⁾が広がっている一方で、積極的に子どもを受け入れている取り組みも見られる。例として、1996年からボランティアとして参加している秋田県鹿角市の「のしろ日本語学習会」では、中国籍子どもとその子どもたちである小学生・高校生・高校生やALT（英語指導助手）、留学生、研究者が参加している夜間の教室にいることも乳幼児を連れた学習者を受け入れているほか、98年より乳幼児を連れた学習者のための年齢中の教室も開設されている。

在住外国人の乳幼児に関する研究としては、保育者、教育社会学等の領域において、多文化保育の場や「国境児」を取り上げた研究はあるが、主に保育園・幼稚園といった制度的に確立された保育現場での研究が中心である。

での研究対象は日本人の母親とその子育て支援に関わるものであったといえる。

本稿では、乳幼児を迎えて来ざるを得ない学習者や乳幼児を迎えてくことを希望する学習者が存在する現状のもと、教室内で乳幼児の存在を学習を始めるマインスイートンとして否定的に捉えるのではなく、乳幼児が学習の場にいることの積極的意味づけを探していきたい。そこで5年以上もの間、乳幼児を学習の場に入れて教室を運営してきたのしる日本留学学会の、外国人配偶者を対象とした教室の活動事例に焦点を当て、その事実からのときおこしを窺いたい。

本稿は、第1章においては、90年代初頭の日本語教室開設以来、親子が共に学べる場、乳幼児を招いた母親が学べる場づくりをしてきたものの、のしろ日本語学習会の概要を整理し、乳幼児と共に学べる場の成立背景を明らかにする。第2章では、乳幼児と共に学ぶ場（本郷教室）の現状として、学習環境整備および学習言語の展開とともに教養活動を具体的に紹介し、日本語学習の場における乳幼児の存在の意義について考察する。そして第3章では、日本語学習の場に乳幼児を入れることの意義と可能性について検討する。

第一章 のしろ日本語学習会の概要

1) 設立の経緯と概要

のしる日本語学習会は、1980年代後半に一時中断された中国帰国者二世との交流を持った北川裕子氏（同会代表）が、1991年の同国者二世会創立の機に設立された日本語教室である。北川氏は中国帰国者に対する生活支援の過程で、自立のための日本語習得の必要性を感じ、より充実した日本語学習支援のために、秋田大学言語文化課程における日本語教育関連の講座や、秋田県国際交流協会、秋田市内で主催する日本国語者養成講座の受講を重視する。

東京都立大学 博士課程 藤田美佳

＜結論＞

[illegible]

* キーワード：乳幼児、外国人配偶者、地域日本語教育、日本語学習支援、ボランティア

はじめに

東北農村部を中心に嫁不足などによる東アジア出身女性との国際結婚がなまり、既に20年が経過した。現在もその傾向は継続しており、去府省統計によれば「日本人の配偶者等」の外国人登録者数は28万人にも上る(四)。

とりわけ90年代の「日本人の配偶者として
来日した外国人女性」(以下、外国配偶者とし
て略記)の急増によって、実際、研究領域にお
いて、彼女たちが直面する生活上の問題と目
して、就女たちの関わりや精神的ケア、保健医療な
どが注視されるようになり、出産や医療場面、
本國学習との関わりなど日本学習支援、教材開発、
カウンセリング論などが展開されるようになって

(4)

その後 90 年代後半からは、出産後、乳幼児を連れて参加できる日本語教室が少ないことが、公開園やボランティア団体によってシモン・ボジウムが喧嘩されるなど、学習機会の減少と大規模な教室が減少している。それらの原因については、記述を行っている教室が少ないため、乳幼児を連れての教室への参加や学習が困難であることが指摘されている。さらに乳幼児を預かることが可能な場合でも、「子供が泣いていると集中して勉強できない」¹⁴⁹⁾、「子供を連れていない人も子供が気になり、学習が中断される」¹⁵⁰⁾「母親が勉強しているそばで子供が遊んでいる」¹⁵¹⁾「母親が勉強しているそばで子供が遊ぶ場合もあるだろうが、子供の数が多くなるほど不都合なことが多くなり、学習者たちもかなりストレスを感じている」¹⁵²⁾「日本語の学習に

わた。そしてそこでの専門的な知識の習得を経て、93年からは、外国人配偶者、ALTや県立大学附属研究機関の客員研究員およびその家族など地域在住の外国人等¹⁰⁾への支援の枠を拡げてきた。

教室は、毎週2回火曜日19:00～21:00と木曜日10:00～12:00に公共施設を借りて開催されている。運営費用は、現在は火曜日が能代市まちづくり課から、木曜日が秋田県国際交流課からの支援を受けており、これに加え参加者(学習者・支援者)からの月額500円の参加費(ただし、乳幼児・児童生徒は無料)によって行われている。

火曜教室の学習者の構成は、中国語国語者(成人、小中高生)、外国人配偶者、県立大学研究員、研究員家族、留学生(高校生)、ALT(英語指導助手)など40名ほどで、木曜教室は、外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者(母親)親子15名ほどが参加している。

学習者の国籍は、中国、フィリピン、韓国、三國が多くを占めるほか、アメリカ、イタリヤ、インド、イギリス、インドネシア、オーストラリア、カナダ、タイ、デンマーク、マレーシア、ミャンマーなど多様な地域からの出身者が構成されている。

一方ボランティア支援者は、主婦、会社員、専門職、退職者、高校生、教員経験者、現職教員、教員志望者など多様な社会的背景を持つ10代～70代の男女と、送迎・子守り・見守りのため参加している学習者の配偶者(日本人男性)からなっている。

学習形態は、火曜教室が公民館1室内で教室形式、グループ学習形式、マンツーマン形式による複数形式の同時進行で、木曜教室は「働く婦人の家」の託児室における教室形式である。使用教材は火曜教室、木曜教室ともに指導者が作成した教材や日本語能力試験対策教材、復習のための市販プリントである。日本語能力試験を受験しない学習者に対しても月に一度、日

本語能力試験対策用の聞き取りテスト(テープ)や、北川氏が作成した聞き取りテスト(虫食い問題)、テープ聞き取りによるディクテーションを行い、音読聞き慣れているボランティアの所以の日本人の声を聞き取る訓練も行っている。

学習者は北川氏の板書をノートに書き写し、練習問題は配付されたプリントに記入し、当てられた練習問題(全員に振り当てられる)は、全員がホワイトボードに答えを記述する形式を取っている。問題は出された翌週提出し、チェックされたものが翌週各人に戻される。そしてその日の授業のはじめに不明な点の質問を受けるサイクルである。このように板書を写す、問題を解く、プリントで復習するといった一連の流れで学習が展開されている。

一方、毎週の教室活動以外にも定期的に行事を開催しており、花見、バス旅行、キャンプ(海)、お茶会、書道講習、装飾り、料理講習、忘年会(クリスマス会)や季節行事(節分、雛祭り、子どもの日、七夕など)を通じて、家族を含めた教室参加者同士の交流を深めると共に、数回りなどは、地域住民への参加機会も開きながら、教室の存在意義や学習者の存在を広く知らしめる機会にしている。

またボランティア間の情報共有の場として、旧来より公式なミーティングや日本語指導のための学習会を月1回開催してきたが、2000年度からは、能代市まちづくり課主催「日本語学習ふれあい支援事業」の日本語指導ボランティア養成講座と連携させる形で場を設けている。

2) 外国人配偶者を対象とした「木曜教室」開設の背景

木曜教室は外国人配偶者を主な対象として1998年に開設された。当初は中国から帰国したばかりの呼び寄せ家族¹¹⁾の男性が、自動車運転免許取得のためや、就職が決定するまでの間参加していたこともあったが、99年以降は

外国人配偶者のみとなった。その後2000年4月からは働く婦人の家・託児室を使用して授業を行っている。

現在はカーペット敷きの部屋に、絵本・玩具・玩具、乳幼児用の布団が整備された環境で学習をすすめているが、開設当初は火曜教室と同様に公民館のタイムズの教室で長机とハイチェア椅子で授業を行っており、乳児は学習者である母親が持参した布団を机の上に広げたり、母親の隣の椅子に布団を置いて座ったりといった形態であった。その頃は、教室内でボランティアと遊ぶ幼児もいたが、玩具・玩具は特になく、また人数が少なかったため幼児同士で遊ぶことは難しく、持参した玩具で遊ぶ程度であった。このほか、母親が勉強している協で乳児が絵書を欲して筆記用具で遊ぶことや、幼児が同様に筆記用具を欲し、母親をまねてノートに絵や文字(しきもの)を書いたり、五十音が並んだ玩具を使ったり母親のサポートでひらがなを学習したりする子どもも存在した。

まず乳幼児を連れて参加可能な教室がどのような背景をもって成立してきたのかを整理しておく。研究の資料として述べたように、乳幼児を連れて外国人配偶者が日本語学習を進める環境が十分に整備されていない状況にある。しかし、のしる日本語学習会の場合は、子どもが生まれても学習を継続したいという外国人配偶者の学習欲求のもと、乳幼児を連れて日本語学習の場に参加することが、ボランティア側からも学習者側からも大きく問題視されることがなかった。なぜ問題視されなかったのか、ここではその具体的な要因と思われる点を木曜教室成立の背景と関連させつつ明らかにしていく。

1点目として、のしる日本語学習会が中国帰国者の生活支援から日本語学習支援へと活動を展開していったことから容易に継続できよう。親も子どもも含めて家族で学習の場に来ること、親子を含めた家族単位での支援が当然視されていたことが挙げられる。ただしその当

時は、小中学生が親と共に参加していることはあったが、帰国三世である幼児は日本人幼児と同様に保育所に入所していたこと、入所当初は言語の問題などによる影響が多少発生したが、継続的な関与とならなかったこともあり、支援者側にとっても、その時点では文化的背景が異なる場合に発生する様々な問題や障壁が十分に想定できず、幼児への対応や支援は特に行っていなかった。

その一方で学齢期の子どもとその親の場合には、マンツーマン形式や教室形式などでそれぞれ日本語学習を進めるケースや、親は自動車運転免許の取得のための学習や生活場面を中心とした日本語学習を進め、一方子どもは教科書学習や高校受験のための試験対策、日本語学習を進めるケースなどその形態は多様であった。

2点目として、学習者、ボランティアともに10代～70代までの多世代が教室に参加しており、皆に行事の際には、孫を連れて参加するボランティアや4世代で参加する中国語国語者などもおり、多様な年齢構成の人々が参加することは日常的であったことが理由としてあげられる。

3点目として97年度より乳幼児を連れて学習者が参加し始めたことがあげられる。

1件目のケースは、教室参加当初(96年)より夫(日本人)が送迎や見守り(学習者の横に座っている)のため同行していた学習者Aさんが出産後(97年)、夫が学習者の隣席や教室の外などで子守りを引き受けて学習を進めたというケースである。

2件目は、県立大学附属研究所・客員研究員の配偶者(女性)である中国人のBさんが、日中は幼稚園に通園中の子どもCちゃんを伴って参加し始めたことがあげられる。父親は研究のため多忙で帰宅が遅くなることも多く、また近隣に親戚や知人がいないBさんはCちゃんを帯同せざるを得なかった。夜の教室への参加であったため、参加に当たっては比較的

Bさん宅に近い北川氏や他のボランティアがその親を迎え、安全を確保した。

この時北川氏やボランティアの間では、子どもを連れてくることを問題視する発言はほとんど出されなかった。というのも、この頃教室には中国籍園児や中国出身の外国人配偶者で子育て中の学習者が数名参加していた。そのため、ボランティアの間では、周囲に知らないBさんが、教室に参加することによって、この場を介して比較的類似した背景を持つ人々と中国語で話し、育児や日本の生活に関する悩み・疑問・喜びなどを分かち合い、見知らぬ土地で暮らすことによるストレスから開放される可能性をもつのではないかと考えられていたからである。

教室内では3歳児Cちゃんは母親の隣のバブイ椅子に座った。タイランドに布団を置いて座っていた。ときおり中国籍園児（高学年男子）やボランティアが遊び相手をすることもあったが、母親の学友が遊びながら、自分も母親と同様に筆記用具や問題のプリントなどを渡し、Bさんがひらがなを点検で書いたものを渡してなぞらせたり、日本語指導者である北川氏が、ひらがな練習帳や簡単な問題を与えたりすることによって、教室内でむずむずかしく感じたりすることはあまりなかった（時には落ち着きのないこともあった）。

一方で、教室内では複数のグループが同時に学習をすすめており、黙然と授業が進められる学校とは異なり、「このうさぎいい、よく集めて勉強できるものだ」などと複数のボランティアや来訪者・見学者からのコメントが漏れられるほどに賑わい、中で学習が進められておられ、幼児一人が多少騒いでもその騒音のみが突出して響いてしまうというところはなかった。この騒々しさについて学習者からは、「うるさい」と感じたりはあっても、[先生や他の人々]の声はちゃんと聞こえます。[学習者たちはそれぞれが口々に話をしていて]遊

んでいるように見えますが[学習内容は]ちゃんと覚えているんです」(Cさんは筆者)とのコメントがあり、一室内で複数の形式での学習を進めざるを得ないことによる賑わいを感じていたボランティアを安心させたこともあった。

これまでの3点は物理的要因や自然発生的な要因として捉えられるが、4点目としてあげられるのは、これら3点の背景によって乳幼児を思いがけなく(やむを得ず)受け入れることになった結果、その後教室の中で発生した新たな学びの機会を北川氏やボランティアが積極的に受け止めたことがあげられる。

具体的には、乳幼児といっても、親が真剣に学んでいる場では、周囲の心配をよそに泣き叫ぶ様子がなく、それどころか、親のまねをして紙やホワイトボードに何かを書きたがるというような積極的な学習状況が発生していたことがあげられる。こうした乳幼児の様子について北川氏は、理論的にはわからないが、親が学んでいることの影響が何かあるのではないかと考えたという。またあるボランティアは、Bさんが、ひらがな練習帳などの基礎的な内容ではあるが、Cちゃんに教えていることがBさんの学習へ間接的な効果を及ぼしているのではないかと考えたという。

これらの背景に加え、県内他地域の教室と比べ、比較的外国人配偶者の数が少なかつた熊本市周辺地域においても外国人配偶者である学習者が増加してきたことが大きな後押しとなり、北川氏は外国人配偶者を対象とした午前中の教室の開設を決断した。

2章 日本語学習の場における乳幼児の多義性——「木曜教室」の現状

日本語学習の場における乳幼児の存在は、学習を始める存在としてだけではなく、学習を促進させる存在にもなっているのではない。ここでは、乳幼児が学習の場にいることによって、どのような支援・工夫がなされているのかを、学習環境の整備、人的サポートの側面から整理し、さらに乳幼児の教室内での様子を紹介しつつ、教室の現状を具体的にみていく。

1) 日本語能力試験の受験と合格

地域の日本語教室では、比較的類似した文化的・社会的背景を有する外国人同士との交流の場や、地域住民と外国人との交流の場として機能することを主眼に置き、日本語習得のための学習支援を重視していない教室も見受けられる。一方のしろ日本語学習会の場合は、地域で自立して生きていくために必要な日本語の習得を支援することが設立の目的の一つであったため、周囲からの承認を得るための一つの目安ともなる日本語能力試験の受験・合格のためのサポートを行っている。

託児室で教室が開催されるようになった2000年に、乳幼児を連れて参加している外国人配偶者や、同様に乳幼児を抱える中国籍園児二世が初めて日本語能力試験(2級、3級)を受験し合格した。この時の合格者は火曜教室へ乳幼児を連れて参加していた学習者達で、前述の「…遊んでいるように見えますが、…」とコメントした方も含まれている。そして翌2001年には、2000年より幼児を連れて参加していた学習者が3級を、火曜教室を含めこれまで4年間教室に参加し、前年3級に合格した学習者が2級を受験し、それぞれ合格した。この2級合格者Aさんは週1～2回の学習を継続し、2002年には1級を受験し合格した。

彼女たちの年間学習量は週に1～2回各2

時間の教室参加と毎週配布される復習を中心とした宿題プリント、8月の受験申し込み以降に受験者のみに配布される試験対策のための宿題のみである。例えば1級に合格したAさんの場合は、育児・家事・仕事という多忙な毎日を送っているため、日本語教室への参加と宿題を中心とした学習、受験の直前月には教室内で試験対策のテキストに取り組み、北川氏やボランティアに不明な点を解説してもらった形式で学習を進め、試験に臨んだ。他の受験者は教室での学習と宿題のみで試験に合格している状況であり、乳幼児を連れて参加している日本語学習に集中できているものと思われる。

地方小都市特有の偏見として、日本語能力試験の受験のために上京しなければならないという制約がある。そのためすべての学習者が気軽に受験できる状況ではない。しかし試験に合格するまでの期間や、記入等のサポートを行っているため、毎年受験希望者がおり、とりわけ近年は木曜教室に参加する外国人配偶者が受験を希望する傾向にある。

特に外国人配偶者の場合は、教室での学習成果や彼女が何のために学んでいるかを家族に理解してもらえない限り、費用面や子どもを預けること、家を空けることなど受験に当たってのサポートが得られないことがあげられる。戦後の民法改正では、日本国憲法の男女平等規定のもとで家族制度⁽¹⁰⁾が廃止されたが、のしろ日本語学習会の活動基盤である地方小都市や農村部では、現在においても「男は外・女は内(家)」という性差に基づく権力・役割配分が依然として反映している状況がある。そのため家父長制⁽¹¹⁾の影響による家庭内での権威関係が強く機能している側面があり、受験を許可してもらえないことそのものが、家族が外国人配偶者の学習成果を肯定的に受け止めてくれるとも考えられる。

木曜教室ですべてに次年度(2003年度)の受験希望者も出てきており、外国人配偶者の日

である。また記念堂全体の味がカーペット貼りのため、教室中を這うことも可能であるし、転んだときの衝撃も少ない。さらに乳幼児が主に遊ぶエリアには3m四方の滑手の布面状の敷物を敷いてあるため、衝撃はさらに少なくなっており、寝転がることも可能である。また乳児のために敷物の上に常に布団が用意されている。そして布団の脇には保育ボランティアが少なくとも常時1名座っている状態にある。

学習机は折り畳み型机卓を借りて記念堂に持ち込み、遊具であるクッション製のサイコロを椅子にし、床ワイヤーボードを部屋の中心において学習を進めている。

2) 日本語学習に集中できる仕組み

ここでは教室の同僚場所と人的サポートの2つの側面から教室内で日本語学習に集中できる条件をみていく。

1. 託児室という学習環境

乳幼児を受け入れるに当たって、託児室を学
習の場として活用していることがあげられる。
88年に外国人配偶者を対象とした木曜教室を
開始して以来、学習環境整備のために託児室を
増設することを要望してきたが、様々な制約や障
害があり、託児室を確保するまでに2年を要
した。この間公民館の会議室を借りて活動して
いたが、会議室はタイル殿の床のため、乳幼
児が這ったり寝たりすることには適当な環境
ではなく、転んで怪我をしたり、車や椅子に頭
や身体をぶつけたたりする危険性がいっつも
ある。また学習者が持参する玩具がいっつも
少く、子どもによってはずすに耐えてしま
い、教室内をウロウロと徘徊したり、母親の周り
をまわったりして離れないといったことも
あった。

現在、木曜教室を開催している託児室内には、昔り台・木馬などの遊具をはじめ、オルガン、元貝、絵本が用意されているため、それらを使って幼児が一人遊びをすることも幼児同士で遊んだり、ボールペンアと遊んだりすることも可能

ことがあるのではないが、子どもと遊ばないでよいのなら手伝てみたいという教室への新規参加者が得られ、教室への参加の枠が広がったといえよう。そしてその結果、多くの乳幼児の受け入れが可能になったことがあげられる。

教室内には、日本語指導を行う北川氏のほか、
元小学校教諭の60代女性がアシスタントを務
め、火曜教室にも参加している日本語ポラン
ティアの40代・50代女性、小学校において
外国人児童担当の非常勤講師を務める20代女
性（教員免許保持者）、英語教室の講師を務め
る20代女性、保育ポランティアの40代女性
など複数のポランティアが、教室内での子ども
の動きに目を配っている。

また火曜教室に参加している保育士の女性も、さんが月に1〜3度火曜教室に参加し、専門的なアドバイスもおこなっている。彼女はもともと保育士の専門性を生かすことを目的に教室に参加した訳ではない。能代市内の高校に通学していた頃に教室の存在を知り、参加を希望していたが、家が市外で夜間の教室に参加することができなかったという。その後2000年に能代市内の私立保育園へ就職したこと機に火曜教室へ参加した。

木曜教室への参画についてのたずねたところ、勤務先の部長は地域の国際化に理解を示しており、今後仕事上で日本語教室で学んだことを生かす可能性も出てくるとは思いますが、日本人が相手の今の仕事でもすでに生かせることが本分にあるんですよと語り、現在では「保育園での子供達を日本語教室に生かすというよりも、日本の経験で日本語教室の経験で保育園でどう生かすかという状態」だという。さらに、「自分が何かをしなくても貢献しているというよりも、華はせてもらっている気がしている」ことを添えた。

そして驚いたこととして、「日本語教室で子どもが親に何か質問すると、親は大人を相手に話してみたいに答えていること」を挙げた。今後

3) 教室内での乳幼児の様子

これまで述べてきたように学習に集中できる条件を整えても、乳幼児が泣いたり、寝にまどったりついたりして落ち着きがなかったりするというような乳幼児特有の行動によって、学習が妨げられてしまうのではないか。しかし、この乳幼児はほとんども泣かないのである。不審に思われるかもしれないが、転んだり、どこかにぶつかったりして泣かないことが観察を通じて把握できた。もちろん教室に初めて参加した乳児(3～4ヶ月)が泣き退席したことはあるが、長い場合でも2ヶ月ほど教室に参加するうちに泣き止むのがやむやみである。なぜ泣いたり、まどったりしないのだろうか。

その理由の一つとして、教室内には玩具や遊具がふんだんに用意されており、一人遊びも可能であること、さらに日本語指導者およびその補助員だけでなくも地元のボランティアが教室内にいるため、常に乳幼児の様子を見て、一緒に遊んだり、絵本を読んだり、抱きかかえて外を見せたり、トイレに連れて行ったり、服機変に手をすることも可能であり、乳幼児のペースに合わせて対応をしていることがあげられる点。ここで本項では乳幼児の教室での様子に焦点を当て、具体的にいくつかのエピソードを紹介しよう。

【エピソード1：読み聞かせ】

ある日母親が電話を解いている間、2歳児のDちゃんが「これ読んで」と北川氏に絵本を差し出した。

その様子を見ていたと思われるDちゃん、Fちゃん、Gちゃん、Hちゃん、Iちゃん、Jちゃん、Kちゃん、Lちゃん、Mちゃん、Nちゃん、Oちゃん、Pちゃん、Qちゃん、Rちゃん、Sちゃん、Tちゃん、Uちゃん、Vちゃん、Wちゃん、Xちゃん、Yちゃん、Zちゃん、AAちゃん、ABちゃん、ACちゃん、ADちゃん、AEちゃん、AFちゃん、AGちゃん、AHちゃん、AIちゃん、AJちゃん、AKちゃん、ALちゃん、AMちゃん、ANちゃん、AOちゃん、APちゃん、AQちゃん、ARちゃん、ASちゃん、ATちゃん、AUちゃん、AVちゃん、AWちゃん、AXちゃん、AYちゃん、AZちゃん、BAちゃん、BBちゃん、BCちゃん、BDちゃん、BEちゃん、BFちゃん、BGちゃん、BHちゃん、BIちゃん、BJちゃん、BKちゃん、BLちゃん、BMちゃん、BNちゃん、BOちゃん、BPちゃん、BQちゃん、BRちゃん、BSちゃん、BTちゃん、BUちゃん、BVちゃん、BWちゃん、BXちゃん、BYちゃん、BZちゃん、CAちゃん、CBちゃん、CCちゃん、CDちゃん、CEちゃん、CFちゃん、CGちゃん、CHちゃん、CIちゃん、CJちゃん、CKちゃん、CLちゃん、CMちゃん、CNちゃん、COちゃん、CPちゃん、CQちゃん、CRちゃん、CSちゃん、CTちゃん、CUちゃん、CVちゃん、CWちゃん、CXちゃん、CYちゃん、CZちゃん、DAちゃん、DBちゃん、DCちゃん、DDちゃん、DEちゃん、DFちゃん、DGちゃん、DHちゃん、DIちゃん、DJちゃん、DKちゃん、DLちゃん、DMちゃん、DNちゃん、DOちゃん、DPちゃん、DQちゃん、DRちゃん、DSちゃん、DTちゃん、DUちゃん、DVちゃん、DWちゃん、DXちゃん、DYちゃん、DZちゃん、EAちゃん、EBちゃん、ECちゃん、EDちゃん、EEちゃん、EFちゃん、EGちゃん、EHちゃん、EIちゃん、EJちゃん、EKちゃん、ELちゃん、EMちゃん、ENちゃん、EOちゃん、EPちゃん、EQちゃん、ERちゃん、ESちゃん、ETちゃん、EUちゃん、EVちゃん、EWちゃん、EXちゃん、EYちゃん、EZちゃん、FAちゃん、FBちゃん、FCちゃん、FDちゃん、FEちゃん、FFちゃん、FGちゃん、FHちゃん、FIちゃん、FJちゃん、FKちゃん、FLちゃん、FMちゃん、FNちゃん、FOちゃん、FPちゃん、FQちゃん、FRちゃん、FSちゃん、FTちゃん、FUちゃん、FVちゃん、FWちゃん、FXちゃん、FYちゃん、FZちゃん、GAちゃん、GBちゃん、GCちゃん、GDちゃん、GEちゃん、GFちゃん、GGちゃん、GHちゃん、GIちゃん、GJちゃん、GKちゃん、GLちゃん、GMちゃん、GNちゃん、GOちゃん、GPちゃん、GQちゃん、GRちゃん、GSちゃん、GTちゃん、GUちゃん、GVちゃん、GWちゃん、GXちゃん、GYちゃん、GZちゃん、HAちゃん、HBちゃん、HCちゃん、HDちゃん、HEちゃん、HFちゃん、HGちゃん、HHちゃん、HIちゃん、HJちゃん、HKちゃん、HLちゃん、HMちゃん、HNちゃん、HOちゃん、HPちゃん、HQちゃん、HRちゃん、HSちゃん、HTちゃん、HUちゃん、HVちゃん、HWちゃん、HXちゃん、HYちゃん、HZちゃん、IAちゃん、IBちゃん、ICちゃん、IDちゃん、IEちゃん、IFちゃん、IGちゃん、IHちゃん、IIちゃん、IJちゃん、IKちゃん、ILちゃん、IMちゃん、INちゃん、IOちゃん、IPちゃん、IQちゃん、IRちゃん、ISちゃん、ITちゃん、IUちゃん、IVちゃん、IWちゃん、IXちゃん、IYちゃん、IZちゃん、JAちゃん、JBちゃん、JCちゃん、JDちゃん、JEちゃん、JFちゃん、JGちゃん、JHちゃん、JIちゃん、JJちゃん、JKちゃん、JLちゃん、JMちゃん、JNちゃん、JOちゃん、JPちゃん、JQちゃん、JRちゃん、JSちゃん、JTちゃん、JUちゃん、JVちゃん、JWちゃん、JXちゃん、JYちゃん、JZちゃん、KAちゃん、KBちゃん、KCちゃん、KDちゃん、KEちゃん、KFちゃん、KGちゃん、KHちゃん、KIちゃん、KJちゃん、KKちゃん、KLちゃん、KMちゃん、KNちゃん、KOちゃん、KPちゃん、KQちゃん、KRちゃん、KSちゃん、KTちゃん、KUちゃん、KVちゃん、KWちゃん、KXちゃん、KYちゃん、KZちゃん、LAちゃん、LBちゃん、LCちゃん、LDちゃん、LEちゃん、LFちゃん、LGちゃん、LHちゃん、LIちゃん、LJちゃん、LKちゃん、LLちゃん、LMちゃん、LNちゃん、LOちゃん、LPちゃん、LQちゃん、LRちゃん、LSちゃん、LTちゃん、LUちゃん、LVちゃん、LWちゃん、LXちゃん、LYちゃん、LZちゃん、MAちゃん、MBちゃん、MCちゃん、MDちゃん、MEちゃん、MFちゃん、MGちゃん、MHちゃん、MIちゃん、MJちゃん、MKちゃん、MLちゃん、MMちゃん、MNちゃん、MOちゃん、MPちゃん、MQちゃん、MRちゃん、MSちゃん、MTちゃん、MUちゃん、MVちゃん、MWちゃん、MXちゃん、MYちゃん、MZちゃん、NAちゃん、NBちゃん、NCちゃん、NDちゃん、NEちゃん、NFちゃん、NGちゃん、NHちゃん、NIちゃん、NJちゃん、NKちゃん、NLちゃん、NMちゃん、NNちゃん、NOちゃん、NPちゃん、NQちゃん、NRちゃん、NSちゃん、NTちゃん、NUちゃん、NVちゃん、NWちゃん、NXちゃん、NYちゃん、NZちゃん、OAちゃん、OBちゃん、OCちゃん、ODちゃん、OEちゃん、OFちゃん、OGちゃん、OHちゃん、OIちゃん、OJちゃん、OKちゃん、OLちゃん、OMちゃん、ONちゃん、OOちゃん、OPちゃん、OQちゃん、ORちゃん、OSちゃん、OTちゃん、OUちゃん、OVちゃん、OWちゃん、OXちゃん、OYちゃん、OZちゃん、PAちゃん、PBちゃん、PCちゃん、PDちゃん、PEちゃん、PFちゃん、PGちゃん、PHちゃん、PIちゃん、PJちゃん、PKちゃん、PLちゃん、PMちゃん、PNちゃん、POちゃん、PPちゃん、PQちゃん、PRちゃん、PSちゃん、PTちゃん、PUちゃん、PVちゃん、PWちゃん、PXちゃん、PYちゃん、PZちゃん、QAちゃん、QBちゃん、QCちゃん、QDちゃん、QEちゃん、QFちゃん、QGちゃん、QHちゃん、QIちゃん、QJちゃん、QKちゃん、QLちゃん、QMちゃん、QNちゃん、QOちゃん、QPちゃん、QQちゃん、QRちゃん、QSちゃん、QTちゃん、QUちゃん、QVちゃん、QWちゃん、QXちゃん、QYちゃん、QZちゃん、RAちゃん、RBちゃん、RCちゃん、RDちゃん、REちゃん、RFちゃん、RGちゃん、RHちゃん、RIちゃん、RJちゃん、RKちゃん、RLちゃん、RMちゃん、RNちゃん、ROちゃん、RPちゃん、RQちゃん、RRちゃん、RSちゃん、RTちゃん、RUちゃん、RVちゃん、RWちゃん、RXちゃん、RYちゃん、RZちゃん、SAちゃん、SBちゃん、SCちゃん、SDちゃん、SEちゃん、SFちゃん、SGちゃん、SHちゃん、SIちゃん、SJちゃん、SKちゃん、SLちゃん、SMちゃん、SNちゃん、SOちゃん、SPちゃん、SQちゃん、SRちゃん、SSちゃん、STちゃん、SUちゃん、SVちゃん、SWちゃん、SXちゃん、SYちゃん、SZちゃん、TAちゃん、TBちゃん、TCちゃん、TDちゃん、TEちゃん、TFちゃん、TGちゃん、THちゃん、TIちゃん、TJちゃん、TKちゃん、TLちゃん、TMちゃん、TNちゃん、TOちゃん、TPちゃん、TQちゃん、TRちゃん、TSちゃん、TTちゃん、TUちゃん、TVちゃん、TWちゃん、TXちゃん、TYちゃん、TZちゃん、UAちゃん、UBちゃん、UCちゃん、UDちゃん、UEちゃん、UFちゃん、UGちゃん、UHちゃん、UIちゃん、UJちゃん、UKちゃん、ULちゃん、UMちゃん、UNちゃん、UOちゃん、UPちゃん、UQちゃん、URちゃん、USちゃん、UTちゃん、UUちゃん、UVちゃん、UWちゃん、UXちゃん、UYちゃん、UZちゃん、VAちゃん、VBちゃん、VCちゃん、VDちゃん、VEちゃん、VFちゃん、VGちゃん、VHちゃん、VIちゃん、VJちゃん、VKちゃん、VLちゃん、VMちゃん、VNちゃん、VOちゃん、VPちゃん、VQちゃん、VRちゃん、VSちゃん、VTちゃん、VUちゃん、VVちゃん、VWちゃん、VXちゃん、VYちゃん、VZちゃん、WAちゃん、WBちゃん、WCちゃん、WDちゃん、WEちゃん、WFちゃん、WGちゃん、WHちゃん、WIちゃん、WJちゃん、WKちゃん、WLちゃん、WMちゃん、WNちゃん、WOちゃん、WPちゃん、WQちゃん、WRちゃん、WSちゃん、WTちゃん、WUちゃん、WVちゃん、WWちゃん、WXちゃん、WYちゃん、WZちゃん、XAちゃん、XBちゃん、XCちゃん、XDちゃん、XEちゃん、XFちゃん、XGちゃん、XHちゃん、XIちゃん、XJちゃん、XKちゃん、XLちゃん、XMちゃん、XNちゃん、XOちゃん、XPちゃん、XQちゃん、XRちゃん、XSちゃん、XTちゃん、XUちゃん、XVちゃん、XWちゃん、XXちゃん、XYちゃん、XZちゃん、YAちゃん、YBちゃん、YCちゃん、YDちゃん、YEちゃん、YFちゃん、YGちゃん、YHちゃん、YIちゃん、YJちゃん、YKちゃん、YLちゃん、YMちゃん、YNちゃん、YOちゃん、YPちゃん、YQちゃん、YRちゃん、YSちゃん、YTちゃん、YUちゃん、YVちゃん、YWちゃん、YXちゃん、YYちゃん、YZちゃん、ZAちゃん、ZBちゃん、ZCちゃん、ZDちゃん、ZEちゃん、ZFちゃん、ZGちゃん、ZHちゃん、ZIちゃん、ZJちゃん、ZKちゃん、ZLちゃん、ZMちゃん、ZNちゃん、ZOちゃん、ZPちゃん、ZQちゃん、ZRちゃん、ZSちゃん、ZTちゃん、ZUちゃん、ZVちゃん、ZWちゃん、ZXちゃん、ZYちゃん、ZZちゃん、AAちゃん、ABちゃん、ACちゃん、ADちゃん、AEちゃん、AFちゃん、AGちゃん、AHちゃん、AIちゃん、AJちゃん、AKちゃん、ALちゃん、AMちゃん、ANちゃん、AOちゃん、APちゃん、AQちゃん、ARちゃん、ASちゃん、ATちゃん、AUちゃん、AVちゃん、AWちゃん、AXちゃん、AYちゃん、AZちゃん、BAちゃん、BBちゃん、BCちゃん、BDちゃん、BEちゃん、BFちゃん、BGちゃん、BHちゃん、BIちゃん、BJちゃん、BKちゃん、BLちゃん、BMちゃん、BNちゃん、BOちゃん、BPちゃん、BQちゃん、BRちゃん、BSちゃん、BTちゃん、BUちゃん、BVちゃん、BWちゃん、BXちゃん、BYちゃん、BZちゃん、CAちゃん、CBちゃん、CCちゃん、CDちゃん、CEちゃん、CFちゃん、CGちゃん、CHちゃん、CIちゃん、CJちゃん、CKちゃん、CLちゃん、CMちゃん、CNちゃん、COちゃん、CPちゃん、CQちゃん、CRちゃん、CSちゃん、CTちゃん、CUちゃん、CVちゃん、CWちゃん、CXちゃん、CYちゃん、CZちゃん、DAちゃん、DBちゃん、DCちゃん、DDちゃん、DEちゃん、DFちゃん、DGちゃん、DHちゃん、DIちゃん、DJちゃん、DKちゃん、DLちゃん、DMちゃん、DNちゃん、DOちゃん、DPちゃん、DQちゃん、DRちゃん、DSちゃん、DTちゃん、DUちゃん、DVちゃん、DWちゃん、DXちゃん、DYちゃん、DZちゃん、EAちゃん、EBちゃん、ECちゃん、EDちゃん、EEちゃん、EFちゃん、EGちゃん、EHちゃん、EIちゃん、EJちゃん、EKちゃん、ELちゃん、EMちゃん、ENちゃん、EOちゃん、EPちゃん、EQちゃん、ERちゃん、ESちゃん、ETちゃん、EUちゃん、EVちゃん、EWちゃん、EXちゃん、EYちゃん、EZちゃん、FAちゃん、FBちゃん、FCちゃん、FDちゃん、FEちゃん、FFちゃん、FGちゃん、FHちゃん、FIちゃん、FJちゃん、FKちゃん、FLちゃん、FMちゃん、FNちゃん、FOちゃん、FPちゃん、FQちゃん、FRちゃん、FSちゃん、FTちゃん、FUちゃん、FVちゃん、FWちゃん、FXちゃん、FYちゃん、FZちゃん、GAちゃん、GBちゃん、GCちゃん、GDちゃん、GEちゃん、GFちゃん、GGちゃん、GHちゃん、GIちゃん、GJちゃん、GKちゃん、GLちゃん、GMちゃん、GNちゃん、GOちゃん、GPちゃん、GQちゃん、GRちゃん、GSちゃん、GTちゃん、GUちゃん、GVちゃん、GWちゃん、GXちゃん、GYちゃん、GZちゃん、HAちゃん、HBちゃん、HCちゃん、HDちゃん、HEちゃん、HFちゃん、HGちゃん、HHちゃん、HIちゃん、HJちゃん、HKちゃん、HLちゃん、HMちゃん、HNちゃん、HOちゃん、HPちゃん、HQちゃん、HRちゃん、HSちゃん、HTちゃん、HUちゃん、HVちゃん、HWちゃん、HXちゃん、HYちゃん、HZちゃん、IAちゃん、IBちゃん、ICちゃん、IDちゃん、IEちゃん、IFちゃん、IGちゃん、IHちゃん、IIちゃん、IJちゃん、IKちゃん、ILちゃん、IMちゃん、INちゃん、IOちゃん、IPちゃん、IQちゃん、IRちゃん、ISちゃん、ITちゃん、IUちゃん、IVちゃん、IWちゃん、IXちゃん、IYちゃん、IZちゃん、JAちゃん、JBちゃん、JCちゃん、JDちゃん、JEちゃん、JFちゃん、JGちゃん、JHちゃん、JIちゃん、JJちゃん、JKちゃん、JLちゃん、JMちゃん、JNちゃん、JOちゃん、JPちゃん、JQちゃん、JRちゃん、JSちゃん、JTちゃん、JUちゃん、JVちゃん、JWちゃん、JXちゃん、JYちゃん、JZちゃん、KAちゃん、KBちゃん、KCちゃん、KDちゃん、KEちゃん、KFちゃん、KGちゃん、KHちゃん、KIちゃん、KJちゃん、KKちゃん、KLちゃん、KMちゃん、KNちゃん、KOちゃん、KPちゃん、KQちゃん、KRちゃん、KSちゃん、KTちゃん、KUちゃん、KVちゃん、KWちゃん、KXちゃん、KYちゃん、KZちゃん、LAちゃん、LBちゃん、LCちゃん、LDちゃん、LEちゃん、LFちゃん、LGちゃん、LHちゃん、LIちゃん、LJちゃん、LKちゃん、LLちゃん、LMちゃん、LNちゃん、LOちゃん、LPちゃん、LQちゃん、LRちゃん、LSちゃん、LTちゃん、LUちゃん、LVちゃん、LWちゃん、LXちゃん、LYちゃん、LZちゃん、MAちゃん、MBちゃん、MCちゃん、MDちゃん、MEちゃん、MFちゃん、MGちゃん、MHちゃん、MIちゃん、MJちゃん、MKちゃん、MLちゃん、MMちゃん、MNちゃん、MOちゃん、MPちゃん、MQちゃん、MRちゃん、MSちゃん、MTちゃん、MUちゃん、MVちゃん、MWちゃん、MXちゃん、MYちゃん、MZちゃん、NAちゃん、NBちゃん、NCちゃん、NDちゃん、NEちゃん、NFちゃん、NGちゃん、NHちゃん、NIちゃん、NJちゃん、NKちゃん、NLちゃん、NMちゃん、NNちゃん、NOちゃん、NPちゃん、NQちゃん、NRちゃん、NSちゃん、NTちゃん、NUちゃん、NVちゃん、NWちゃん、NXちゃん、NYちゃん、NZちゃん、OAちゃん、OBちゃん、OCちゃん、ODちゃん、OEちゃん、OFちゃん、OGちゃん、OHちゃん、OIちゃん、OJちゃん、OKちゃん、OLちゃん、OMちゃん、ONちゃん、OOちゃん、OPちゃん、OQちゃん、ORちゃん、OSちゃん、OTちゃん、OUちゃん、OVちゃん、OWちゃん、OXちゃん、OYちゃん、OZちゃん、PAちゃん、PBちゃん、PCちゃん、PDちゃん、PEちゃん、PFちゃん、PGちゃん、PHちゃん、PIちゃん、PJちゃん、PKちゃん、PLちゃん、PMちゃん、PNちゃん、POちゃん、PPちゃん、PQちゃん、PRちゃん、PSちゃん、PTちゃん、PUちゃん、PVちゃん、PWちゃん、PXちゃん、PYちゃん、PZちゃん、QAちゃん、QBちゃん、QCちゃん、QDちゃん、QEちゃん、QFちゃん、QGちゃん、QHちゃん、QIちゃん、QJちゃん、QKちゃん、QLちゃん、QMちゃん、QNちゃん、QOちゃん、QPちゃん、QQちゃん、QRちゃん、QSちゃん、QTちゃん、QUちゃん、QVちゃん、QWちゃん、QXちゃん、QYちゃん、QZちゃん、RAちゃん、RBちゃん、RCちゃん、RDちゃん、REちゃん、RFちゃん、RGちゃん、RHちゃん、RIちゃん、RJちゃん、RKちゃん、RLちゃん、RMちゃん、RNちゃん、ROちゃん、RPちゃん、RQちゃん、RRちゃん、RSちゃん、RTちゃん、RUちゃん、RVちゃん、RWちゃん、RXちゃん、RYちゃん、RZちゃん、SAちゃん、SBちゃん、SCちゃん、SDちゃん、SEちゃん、SFちゃん、SGちゃん、SHちゃん、SIちゃん、SJちゃん、SKちゃん、SLちゃん、SMちゃん、SNちゃん、SOちゃん、SPちゃん、SQちゃん、SRちゃん、SSちゃん、STちゃん、SUちゃん、SVちゃん、SWちゃん、SXちゃん、SYちゃん、SZちゃん、TAちゃん、TBちゃん、TCちゃん、TDちゃん、TEちゃん、TFちゃん、TGちゃん、THちゃん、TIちゃん、TJちゃん、TKちゃん、TLちゃん、TMちゃん、TNちゃん、TOちゃん、TPちゃん、TQちゃん、TRちゃん、TSちゃん、TTちゃん、TUちゃん、TVちゃん、TWちゃん、TXちゃん、TYちゃん、TZちゃん、UAちゃん、UBちゃん、UCちゃん、UDちゃん、UEちゃん、UFちゃん、UGちゃん、UHちゃん、UIちゃん、UJちゃん、UKちゃん、ULちゃん、UMちゃん、UNちゃん、UOちゃん、UPちゃん、UQちゃん、URちゃん、USちゃん、UTちゃん、UUちゃん、UVちゃん、UWちゃん、UXちゃん、UYちゃん、UZちゃん、VAちゃん、VBちゃん、VCちゃん、VDちゃん、VEちゃん、VFちゃん、VGちゃん、VHちゃん、VIちゃん、VJちゃん、VKちゃん、VLちゃん、VMちゃん、VNちゃん、VOちゃん、VPちゃん、VQちゃん、VRちゃん、VSちゃん、VTちゃん、VUちゃん、VVちゃん、VWちゃん、VXちゃん、VYちゃん、VZちゃん、WAちゃん、WBちゃん、WCちゃん、WDちゃん、WEちゃん、WFちゃん、WGちゃん、WHちゃん、WIちゃん、WJちゃん、WKちゃん、WLちゃん、WMちゃん、WNちゃん、WOちゃん、WPちゃん、WQちゃん、WRちゃん、WSちゃん、WTちゃん、WUちゃん、WVちゃん、WWちゃん、WXちゃん、WYちゃん、WZちゃん、XAちゃん、XBちゃん、XCちゃん、XDちゃん、XEちゃん、XFちゃん、XGちゃん、XHちゃん、XIちゃん、XJちゃん、XKちゃん、XLちゃん、XMちゃん、XNちゃん、XOちゃん、XPちゃん、XQちゃん、XRちゃん、XSちゃん、XTちゃん、XUちゃん、XVちゃん、XWちゃん、XXちゃん、XYちゃん、XZちゃん、YAちゃん、YBちゃん、YCちゃん、YDちゃん、YEちゃん、YFちゃん、YGちゃん、YHちゃん、YIちゃん、YJちゃん、YKちゃん、YLちゃん、YMちゃん、YNちゃん、YOちゃん、YPちゃん、YQちゃん、YRちゃん、YSちゃん、YTちゃん、YUちゃん、YVちゃん、YWちゃん、YXちゃん、YZちゃん、ZAちゃん、ZBちゃん、ZCちゃん、ZDちゃん、ZEちゃん、ZFちゃん、ZGちゃん、ZHちゃん、ZIちゃん、ZJちゃん、ZKちゃん、ZLちゃん、ZMちゃん、ZNちゃん、ZOちゃん、ZPちゃん、ZQちゃん、ZRちゃん、ZSちゃん、ZTちゃん、ZUちゃん、ZVちゃん、ZWちゃん、ZXちゃん、ZYちゃん、ZZちゃん

北川氏は彼女たち3名に対し、「あれ？どうしたの？始まるわー」と声を掛けて一緒に本を扱うように促し、そしてその後差し出された本で読み聞かせを行った。

この光景を目にしたDちゃんの母親Gさんへのその後の聞き取りによれば、Dちゃんは絵本に興味を持ち、文字が読めるわけではないが、本を欲しがるようになったという。そのため、開始前にもしくは終了後に、開始前段である図書館へ立ち寄るのが週に一度の決まり事となったという。Gさんは筆者に対し「[Dちゃん]は読めないよ、でも本が大好きなんだ」と照れ笑いを浮かべた。そして、Dちゃんが絵本を欲しがったことが、図書館へ足を運ぶきっかけになったと語った。

その数ヶ月後、Gさんをはじめとした数名の学習者から、ひらがなを覚えても、子どもにうまく絵本を読んでもあげることができないがどうしたらよいかとの悩みが寄せられた。そこで北川氏は、北川氏が海外クラブ（編者）の講師を務め、また留学生や中国語生がつかうて在籍し、これまでも数名の生徒がボランティアとして教室に参加してきたX高校の生徒へこの悩みを打ち明けた。最終的に海外クラブの生徒への個人的な依頼ではなく、同校へ依頼する形となり、放課後にはじめて3年生15名の協力を得て、読み聞かせ用の朗読テープが完成した。

依頼に当たっては、学習者10名が北川氏を

はじめとするボランティアのアドバイスを基に15冊の絵本を選んだ。結果的にそのうちの多くが、高学年が幼児期に読み聞かせしてもらった本であったため、収録中は幼少時を振り返りながら、思い出話を聞かせるほどの盛り上がりがあったという。テープは、2002年の7～8月の夏休み期間を利用して収録され、9月に学習者の手に渡った。

参加した15名の高校生からは、「プロではないので、完璧なお手本とはいえないけど、少しでも外国人のお母さん達の手助けになればいい」との声を寄せられた。さらにその後、この取り組みを見ていた2年生たちが自分たちも協力したいとの意思を表明し、2003年1月には、窓口となった教師から北川氏に対して、継続事項として取り組みたいとの希望が寄せられた。

【エピソード2：泣かない幼児】

1歳児Eちゃんはよちよち状態であるが、一人で教室内を歩き回ることが可能である。北川氏がホワイトボードの前で学習者に説明をしている時には、母親の元まで行き、抱きかかえられながら母親と一緒に楽しく説明を聞いている。

北川氏の説明が終わると、母の元を離れ、滑り台の周りをウロウロしはじめた。その様子を見ていたボランティアはEちゃんを支えながら階段を上らせ、滑り台で遊ばせた。

Eちゃんは滑り台遊びが一番のお気に入りらしく、毎週のようにボランティアに滑り台遊びをさせてもらっていた。いつものように何度も繰り返し滑るうちに飽きてきたのか、滑り台を離れようとする仕草を見せたため、ボランティアはEちゃんと共にいったん、滑り台を離れた。そしてEちゃんは他の幼児の脇でおもちゃ箱をあそびはじめた。

ところがその後、ゴンという音がした。音

の出所はEちゃんが滑り台の階段部分に突っ込んでいったためであった。

あわてたボランティアはEちゃんを抱きかかえ、滑り台の横のスペースへ周囲に移動し、Eちゃんを膝に抱くように乗せて、彼女と向き合う形で手を握り、Eちゃんが1歳児で普通に会話できる相手ではないことを認識しつつも、危ないことをしたと、大丈夫なのかとつないだ手を上下させながら話しかけた。このときEちゃんはかなりの痛みであったと思われるが、全く泣き叫ばなかった。

実はボランティアが抱きかかえて移動し、向き合っている間にEちゃんは母親の方を見ていた。しかし、この時母親は真剣に問題に取り組んでいる最中であつた。

ボランティアは、母親の方を向いたEちゃんを、母親の方へ向かせようとしたが、泣き止まずボランティアの方に向き直り、ボランティアのそばにいようとするとEちゃんの相手をし続けた。

この時のEちゃんとボランティアのすぐ横では別のボランティアとDちゃんが積み木を積んでいた。教室終了後の聞き取りでは、このボランティアは、静かな室内であるにもかかわらず騒いでいる一件には全く気づいていなかったという。

その後、休憩時間になるやいなやEちゃんは母親の元へ向かい、この時初めて泣いた。すぐにボランティアが母親に状況を説明し、身体的に問題のないことも確認した。

Eちゃんは母親に抱いてもらって一瞬泣いた後すぐに泣きやみ、母親の膝でおやつを食べ、飲み物を飲み始めた。食べ終わると何事もなかったかのように他の子どもたちと同じく帰っていく。遊び始めた。

その後Eちゃんは母親と隣席のHさんの間にある乳母車でHさんの息子の足をじかじかさせているのを見つけた。そしてトコトコと近寄り、その直前にHさんがしていたように乳

母車を前進させようと試みたが思うように動かず、手を伸ばして彼の足をさすった。

このように教室内では、子どもが、親が集中して学んでいる様子を感じ取りながら、泣いたり甘えたりすることを我慢するという光景や、他の乳幼児の顔を見ようとするような動きが見られる。こうした教室内での乳幼児の様子について、保育士であるボランティアは、「教室内を歩き回る子どもが多いんですが、声をあげて騒ぐわけでもないし、北川先生やお母さん道も歩き回っていることを気にする様子もないので、静かにさせないといけないという気持ちを持たなくてもすむんです」と語り、教室内の視察を受けているボランティアも驚いている。お母さん達に見えたい」と思っているという。また、教室内での乳幼児の様子について聞いたこととして、「[子ども]不安になると[母親]そばに行き、親が抱きかかるとまた親のそばに帰って一人遊び始める。親のそばに帰って泣いていない」ことを挙げた。

さらに、勤務する保育士間で話されている料理教室について触れ、親子が一緒にいられた料理教室の際は子どもは泣かないが、調理室と児童室に分かれて調理実習を行うと、子どもも親も落ち着かず、子どもは泣き、それを心配して覗きにきた親を見てまた泣くということがあることを挙げ、「子どもは親といたいんだなあと教室と園との両方思った」と語った。

【エピソード3：泣く乳児】

中国帰国二世の配偶者であるJさんは生後4ヶ月のJちゃんを連れて出産後初めて教室に参加した。生まれて初めての教室参加であったこと、自宅とは異なり、教室内が暖房でかなり暑い状態であったためかJちゃんは教室に入るなり、泣き続けた。

日本語学習が始まる頃にはいったん泣きやま

と思う。先生、みんなに選ばれるから」と柏
 木は、先生に話した。先生は「それは、
 先生が選ばれるから」と答えた。先生は
 「それは、先生が選ばれるから」と答
 えた。先生は「それは、先生が選ばれる
 から」と答えた。先生は「それは、先生
 が選ばれるから」と答えた。先生は「そ
 れは、先生が選ばれるから」と答えた。

その後Jちゃんは、初めての参加からほぼ2ヶ月が経過した時点で泣かなくなった。

「Jちゃんが泣かなくなったその日、参加者達はみな「泣かなくなったね」と口々に言い、泣かなくなかったことに對する喜びとともに、これまで教室に参加した子どもたちと同様に2ヶ月程度で泣かなくなかったことを確認したという。北川氏はこの時のことを振り返り、「Jちゃんに参加した」翌週の教室から、Jちゃんを教室の「外」へ出さないで、この子をどうやって泣かさないようにするか、みんなが同じ思いをいっしょに考えてJちゃんと接した感じだった」と語った。Jちゃんが教室に参加したことより、参加者たちはJちゃんを泣かせないことにより、Jちゃんが泣くことによって、母親であるJさんが申し訳なさをなさずにいる様子や、遠慮して教室に来なくなることの方が気がかりだったという。

3章 乳幼児と共に学ぶことの意義と可能性

2章で紹介した3つのエピソードは、極めて複雑な要素を持ち合わせているように思われる。そこで、ここでは、日本語学習の場にも乳幼児が存在することによってひたかれた教室への参加の糸口と、教室への参加を通じて誕生した、地域社会や職出などの関係性の多文化・多層化について、正統的周辺参加論の観点から考察していく。

Lave and Wenger (1993) による正統的周

上の廊下から大きな泣き声が聞こえた。ちょうど階段を上ろうとしていた親子も驚くほどの大きな泣き声が響き、通りかかった親子は一体何事があったのかとの様子で両面を見回していた。

保育の専門家であるKさんに対して、教室に居るよう声を掛けにくいと思ったボランティアは、教室へ戻って他のボランティアに声を掛けた。Jちゃんが泣き叫んでいることを伝えたとこころ。そのボランティアは「ここで泣かせておけばいいのにね。でも専門家でしょ。だからここで泣かせておいてくれとは悪いにくいよね」と言った。

その直後 K さんは泣き叫び続ける「J ちゃん
を連れて教室に戻り、母賴 I さんの隣の布団に
J ちゃんを寝かせた。
再び泣き声が大きくなり、K さんが寝れた隙
に母賴 I さんは布団の上の J ちゃんに顔を近づ
け話しかけた。すると泣きやみ、I さんは再び
日本語学習に戻った。

「Jさんが指導者の側を向くやいやKさんが再びJちゃんをさすったところ、また激しく立ち出し、Kさんがあやし、さすり、口で音を噴らしたが、泣きやまず、母親のJさんが抱くなり大人しくなった。そしてJさんはJちゃんの背中をトントンしながら指導者の側面に寄せつけた。

その後「ちゃん」は母の膝の上でおとなしくしており、指導者の掲げる紙に母と同様に目をやっていた。その後、園に座っている学習者が「やさしいです」という質問に答える際に「ちゃん」に微笑みがけた。その後「ちゃん」は母と他の学習者の間で教室終了時までおとなしくしていった。

野宮終了後、さんは「ちゃんを連れてきてよかったのか、連れて来ない方がよかったのでは」ともらし、頭を下げて帰った。

その後すぐに1さんから北川氏に対して、「先

ただ、母親と離れた位置にある乳児の布団に寝かせ、保育ポランティアが相手しようとしたところ、再び泣き始めたのである。そこで母親の脇に布団を置いて寝かせたところ平静を取り戻し、じちゃんは俯見、母親の方へ手を伸ばすような仕業を見せていた。

そこへ地域の子育て支援事業に関わっている
Jさんが見学に来て、Jちゃんを見つけるなり
抱き上げると、Jちゃんは再び泣きだした。

Kさんは保育の専門家であるため、母親であるじちゃんが子どもを見て、他のボランティアがじちゃんに近寄ろうとしても、泣きやまないじちゃんを抱いたまま取置内を移動しながらあやし続けた。そしてKさんがじちゃんをこのミルクをやるうとしたところ、じちゃんはそれにもまして一段と大声で泣き叫び始めた。

そこで母親！さんがJちゃんを抱こうと手を差し出したのだが、Kさんは母親を制止し、Jちゃんを毛布にくるんで教室の外へ出てしまっ

教室には静寂が訪れた。
火曜教室とは異なり、比較的静かな中で学習
している木曜教室だが、この日ばかりは常にJ
ちゃんらの泣き声が響く中で学習で、突然訪れ
た静けさは教室内に異変と不安をよんだ。
田村さんをはじめボランティアも落ち着かな
い様子となり、どこへいったのかとぞぞぞし
たまじめた。これまでも他の学習者が、生後3ヶ
月同様の乳児を連れて来た際に乳児が泣いたことが
あったが、泣いている乳幼児が教室外へ連れ出
された経験をもたない学習者やボランティア達
は、落ち着かない様子になったことが明らかで
あった。

そこで、あるボランティアが教室の外へ出て

参加論議 (Legitimate Peripheral Participation Theory) では、学習は、個人による知識や技能の習得としてではなく、実践共同体への参加を通じてアイデンティティの定着として捉えられており、産産・仕立屋・模倣士・陶加工職人・新道中のアルコール依存症者の建物の題材に、「新参加者実践共同体 (community of practice)の一部に加わっていくプロセス」が描かれている。

のしろ日本語学習会の場合、教室内外の人的サポートとしておきた学習者の太やボランティアー（＝新参者）は、子守りという役割を持つこととによって、教室という学習空間（共同体）に正統的に同化的なやり方方で参加しながら、結果的に日本語教授法や異文化理解などのさまざまな学びを得ているといえるのではない。

さらに学習者の夫たちは教室への参加を通じて得た気づきや学びによって、地域や家族との新たな関係性を見いだしているものと思われる。例えば教室への公的支援が打ちさされる可及性があることが判明した際に、夫たちが教育行政のための支援の継続を、行政や地域に向けてはたらかせようとしはじめたことや、外国入国者として娘にあたる自分の母親を日本語教室の行事へ誘い出し、姉同士の関係づくりを導き出したりにしていることが挙げられる。

また、Lave and Wenger は「正統的に周辺的な」なやり方で参加できるということは、新参者が既知した知識の本場にも広くアクセスできることを意味している (p4) と述べている。これは、実際の教室には参加していない場合でも外国人生徒が読み聞かせテープを作成した高校生のように、友校や日本語学習支援に関わりうる可能性がひそめられていることと関わりを持つものと思われる。

具体的に教室以外の場からボランティアに参加することになった高校生について考えてみたい。特に国際交流や在住外国人支援に参加したと考えている高校生以外は、きっかりなしに

成や地域づくりに結びつけているのかをさらに
結論に検討していきたい。これらの点について
は別編を聞きたい。

✱

- 日本には、1996年からランティニア¹⁾としての日本文学学会に参加している北海道のフジリー氏はど
わくおおきく代表者である北野浩子氏をはじめ
が低価格からの値上げに基いたものである。
- 2) 法務省人権問題調査課編纂(2002)
- 3) 古川和彦(1995)、森山(1995)、森山(1997)、
中村(2000)、本郷(1998)、釜山(1998)など
- 4) 1996年 ICAS 国際交流都市の日台を交える市民
の会主催「五佐川先生に学ぶママの日本文学講座」
問題点を「ランティニア・ボジウム」, 1997年国際交流
研究所日本教育センター、ICAS 主催「乳幼児
発達した外国在住者の日本・日語学習の困難点を探る」
シンポジウム, 2001年「乳幼児を連れて学習者
etc.に開かれた日本・日語教育を考える」多文化
共生センター「児童21」掲載「子ども達への多文化
教育」国際教育センターシンポジウムなど。
- 5) 国際教育センターシンポジウム(1998)。

- p.75
67. 同上。
71. 同上。 p.79
80. 同上。 p.85
90. 文化庁事業担当画者からの聞き取りによる。
100. 先進のシンポジウムでの聞き取りや発言によれば、
に同等教育を行っている場合でも、学習者・学習
環境等の影響で配属に差を生じ、効率的な学習を推進す
るために海外での配属に行方を見ることがあること
や、子どもを預けてくることが勧められ、子どもが学
習の場にならないよう注意し、ルールを作るとい
う考えが示されている。国立国際研究所以日本
調査員センター (1998)、p.14
111. 安富他は、国際児を、両親または父・母のどちら
かが外国人である子ども、外国で育つて育国した
日本人の子どもとも定義している (1993、p.131)。
121. 日本保育学会 (2001)、栗山 (2001) など。
131. 岩田は、藤田 (1999) 参照。
141. 中国帰国児や帰化した外国人配偶者およびその
子どもなどは「外国人等」とあるケースもあるた
め、本稿では「外国人等」と記述する。

- Walters, S. (1990). *Theorizing Patriarchy*. Basil Blackwell, Oxford.
- 平井千鶴. キヤロル・柴田著 平井千鶴訳. (1986). 「もろこしの声」——男女の垣根のちがいを女性のアフテン・テレビ——. 川島雄三 (ed.), *Cultural Critique*. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 西原照彦. (1996). 近代美術と家父長制. 井上徹, 上野千鶴子 (eds.), 大塚英志と家父長制. 岩波書店. 見出し頁, 258頁.

引用文獻

- Walters, S. (1990). *Theorizing Patriarchy*. Basil Blackwell, Oxford.
- 平井千鶴. キヤロル・柴田著 平井千鶴訳. (1986). 「もろこしの声」——男女の垣根のちがいを女性のアフテン・テレビ——. 川島雄三 (ed.), *Cultural Critique*. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 西原照彦. (1996). 近代美術と家父長制. 井上徹, 上野千鶴子 (eds.), 大塚英志と家父長制. 岩波書店. 見出し頁, 258頁.

- 『東洋の社会学』（岩波講座現代社会学 19）、岩波书店、pp.137-157。
- 国立国際研究所日本研修センター、(1998)、シンポジウム史料館を抱えた在日外国人の日本語学習の現状と展望——平成7年度日本語学習者調査結果をめぐってワーク東京国際都市誌——相模原市、(2000)、『異文化間教育の実践・研究』の紹介1（聴定の報告）<http://www.a-gakugei.ac.jp/~gsato/hbunkaku/jissenkou1.html>
- メイアロフ、ミルバ（田村真・中道之訳）（2002）、『イタの本質——生きることの意味』、ゆめ出版、Hayesoff, M. (1971), *On Caring*, New York: Harper & Row Publishers, Inc.
- レイバ、ジーン・ウェンガー、エディエンズ（佐伯 静訳）、(1993)、『学びに増え込まれた学習』、産業図書、(Lave, J. & Wenger, E. (1991), *Situated learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press, Cambridge.

世界☆誌

- 石井恵理子。(1997)。「外国人配偶者に対する日本語教育の進展」、『日本語学』—21世紀への展望、16。6 (1997年春—21世紀への展望)。
- 石井由希。(1995)。「国際結婚の現状—日本によりよく生きるために」、『朝日洋画』、「定住する外国人」、『海外日本人定住問題』2巻、明石書店、pp.73-102。
- 上野千鶴子。(1990)。「家父長制と資本制—マルクスの主義アフェニズムの地理」、『岩波書店』。
- 桑山紀彦。(1995)。「国際結婚とストレス—アジアからの定住と定着する二つの文化」、『明石書店』。
- 桑山紀彦編纂。(1997)。「ジェンダーと多文化—マライシアを生きるものたち」、『明石書店』。
- 出) 外国人配偶者に対する(1996)。「海外から渡り来た外国人に配偶者に対する日本語研修の必要性」及び日本語学習のニーズ分析」、『平成7年度文化庁—一般外国人に対する日本語研修研究発表、1997』。(1997)。「日本人と結婚した在外日本人女性に対する支援推進のための調査研究」、『平成8年度文部省「女性の社会参加支援特別推進事業」、1997』。
- 藤原信子。(2000)。「公共性」、『岩波書店』。
- 佐伯晴。(1995)。「日本語」ということの意味」、『岩波書店』。

- (1993)、「ワカる」ということの意味」(『新
聞』、岩波書店、2001)。
柴山貴子(2001)、「行為と規範形式のエスノグラ
フィ―留学生家族の子どもは保育園でどう育
つのか」(『東京アジアの文化』、勁草書房、
2004)。
澤地山内(1996)、『東アジアの家父長制―ジェン
ダーと社会』(『社会と文化』、勁草書房、
2004)。
高木光太郎(1999)、「正統的帰化論におけるア
イデンティティ構築機運の拡張―短期滞在異
文化圏に野外に入れた学習者のために」、『東京大
学大学院外国語学系研究紀要』、10、3-14。
――、介在的異文化の専門的知識形成、岩波書店、
2004)。
武川正喜(1998)、『異文化の臨界サービス』、東京
大学出版会、1998-99。
中村建子(2000)、「外国人女性配偶者のための医療
費見つけ方」(『国際に向けて―日本で安心して生
活』、出版、子育てするのために、日本語学習会、
春巻会)。(『大東文化』) 予稿集、pp.124-142。
永岡 達二、住谷 久、藤田茂樹、(1992)、『家と家
父長制』(シリーズ比較文化1)、早稲田大学出
版部、1992)。
日本言語学会、(1991)、『『国語学』特報：国際
化と教育、フレーベ館。
藤田美津(2000)、「林田昭代日本語学習会の発展
経緯―中国留学者および外国留住民の少数住民
地域における英語について、中国留学者定着促
進センター英語班、中国語留学者定着促進セン
ター紀要』、8、145-166。
藤田美津(2003)、「地域ネットワークにおける
メタ・エスノグラフィーのしるし日本語学習会
の取組のなま」として、『異文化間教育』18号、
2003年6月発行予定。
ミース、マリア(『東国城子訳』、(1997)、『国際分
と女性―進化する主婦の心』、日本経済評論社、
2004)。(『ケアの倫理』、大修館書店、
2004)。
安富伸光、阿部真子、池田政子、(1993)、『山梨
の保育における国際化の受け入れについて―
多文化保育・保育の発展』(1)、『山梨県立女子
大学紀要』、26、125-164。
――、(1994)、「国際化の保育から学ぶこと
―多文化保育・保育の発展(2)」、山梨県立女
子大学国際学紀要』、27、111-150。
法華智人(1998)、『異文化の母国語教育』、
1998)、『在日外国人の母子保健―日本
に生るる者』(1)、西京書院。